

開会の挨拶

小森田秋夫（東京大学社会科学研究所 教授・所長）

今日は、暑いなかをたくさんの方々にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

今日の集まりを主催する東京大学社会科学研究所を代表いたしまして、厚くお礼を申し上げます。

東大の社会科学研究所——私たちは「社研」と呼んでおりますが——という名前を初めてお聞きになった方、また聞いたことはあるけれども、一体なにをしているところか分からないという方も、恐らく大勢いらつしやることと思います。

東京大学は大学院を中心とする組織であり、十三の大学院研究科と十一の研究所を擁しております。そのうちの三つが文科系の研究所です。まず、アジア諸国について研究する東洋文化研究所。それから、日本の前近代の歴史史料を編纂して研究する史料編纂所。そして、私たちの社会科学研究所（以下「社研」）。それでは、この研究所は何をしているのかというと、「社会科学を研究している」。公式にはそういうことになっておりますが、これではほとんど説明になりません。

まず社会科学とは、社会現象を事実やデータなどを用いた実証的方法によって分析し、客観的な法則を明らかにしようとする学問の総称です。そして社研の最大の特徴は、法学、政治学、経済学、社会学、歴史学といった社会科学の主要な分野を横断する約五十名の研究スタッフによって構成されていることです。このような諸分野の研究者の力を結集し、また後ほど対談で登場する山田昌弘東京学芸大学教授などを客員教授として迎えたり、またその他の形で研究所外の研究者の皆さんの力もお借りして、研究所全体が総力をあげて取り組む共同研究を行っています。私たちが「全所的プロジェクト研究」と呼んでいるこの共同研究が、社研のもつとも代表的、中心的な活動となっています。

全所的プロジェクト研究では、過去三十年ほどの間に「基本的人権」「戦後改革」「福祉国家」「二十世紀システム」「失われた十年？——九十年代日本を捉えなおす」などのテーマを取り上げてきました。そして今年度からは、二つの新しいプロジェクトを立ち上げました。そのひとつが、本日のテーマである「希望学」なのです。これは「希望」を社会科学的に研究するというプロジェクトで、私たちが名づけた「希望学」という新しい学問を創り出してゆこうというものです。

今日このシンポジウムに登場する研究者は、プロジェクト参加者の一部にすぎません。プロジェクト・リーダー、玄田有史の専門は労働社会学です。今日は、他にも労働関係論、日本経済史や日本経営史、教育社会学と家族社会学、あるいはドイツ法といった専門の研究者が参りました。また、今日はたまたま別の企画がありましてこの場には出られず、準備だけ手伝って大学に戻ったフランス政治哲学の専門家もおり、政治学者もこのプロジェクトに加わっているというわけです。

このような学際的陣容で、私たち社研は「希望学」という新しい学問に取り組みることになりました。東大社研というのは「希望学」に取り組んでいる研究所である、「希望学」をやっているのは東大社研であると、今日からご記憶いただければと思います。

さて、希望学という旗印の下で何をしようとしているか。それは今日のシンポジウムにおいて、これから縦横に語られることとなります。そこで、私からはその前置きとして二つのことを申し上げたいと思います。

社研はこれまでいくつもの全所的プロジェクト研究を行ってきました。だいたい四〜五年かけて研究をし、その成果を多いときは六巻も七巻もの書物にまとめて発表するというのが、私たちの仕事の基本的なスタイルでした。

ところが「希望学」は、まだ本格的な研究を始めてもないうちから、今日このような宣言を行うという異例の形でスタートを切りました。実は社研による全所的プロジェクト研究の歴史の中でも、これは前代未聞、いさか大それたやり方なのです。

大学の研究者が大学の内部に立てこもって研究をし、完成したところで世の中に成果を披露する、というのが従来の方法でした。しかしそうではなく、研究の初めから自分たちの関心を披瀝し、それを多くの人々と共有し、対話を重ねながら学問を作っていくたい——そういう強い願いがあつて、私たちは今日のシンポジウムを開催することにいたしました。

比喩的にいいますと、従来の大学における研究は、料理人が厨房に立てこもって腕によりをかけ、仕上げた料理を食卓に運んで「どうぞ、味わってください」、といってお客さんに品評して貰うというやり方です。

しかし今回、私たちがしようとしているのは、このような方式ではありません。私たちが望むのは、料理を食べる方々に厨房を覗いていただき、注文をつけていただき、時には料理作りにも加わっていただきたい、ということ。自分たち料理人の関心を披露し、多くの人々と関わって対話しながら、つまり食べる人々と一緒に料理つまり学問を作っていくたいと願っています。

実際のところ、厨房と食卓との区別をなくすことは難しいかもしれませんが。しかし食べる人と料理人とを壁で仕切ることなく、少しでも風通しのよい配置にしたい。私たちのこんな狙いと願いが「希望学」には込められています。今日は、ぜひともこのようなメッセージを受け取っていただければ幸いです。そして、この新しい方式の試みが成功するかどうかにも、今後大いに注目して期待していただきたいと思えます。もう一つ申し上げたいのは、このプロジェクトにあまり「期待しないでいただきたい」、ということです。希望の喪失というのは、非常に深く重い問題だと思えます。三年や四年の研究で、この問題に対する「唯一正しい答え」、あるいは「明快ですぐに効果のあがる処方箋」といったものが見つかるとは思われなからず。

むろん、私たちは、どうしたらよいかという実践的な答えを求めようと懸命に努力をいたします。けれどもこのプロジェクトにおいて、その答えより重要なことは、問題を考えるために視野に入れなければならないさまざまな「要因」や、議論をするときに誰も無視することのできない「事実」を豊かに提示すること、そうすることによって、今日お集まりいただいた皆さんをも含めて、私たち希望の喪失という問題に関心を寄せざるすべての人々が、少しでも「賢くなる」ことではないか、と私は考えています。

社会が大学に対して「役に立つ学問」を期待しているということを、私たちは自覚しています。しかし、役に立つということはどういうことだろうか？ どういう役に立ち方があるのだろうか？ といった疑問にも、決まった答えがあるわけではないだろうと思うのです。そしてこの問いに対して、答え方のひとつを示すこと。これも希望学プロジェクトに求められていることではないか、と私は考えています。

今日のシンポジウムは、二時間半という短い時間ですが、厨房から漂ってくる香りの一端を嗅いでいただいて、私たちのプロジェクトとのお付き合いの第一歩としていただければと思っております。

どうもありがとうございます。